様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７１０２

研究課題名（和文）「独日関係の黄金時代」における日独交流組織「和独会」の活動実態に関する研究

研究課題名（英文）Reserch on the actual activities of the interactive organisation "Wa-Doku-Kai" (Deutsch-Japanische Gesellschaft in Berlin) in "the Golden Age of the Relationship between Germany and Japan"

研究代表者
堅田　智子（Katada, Satoko）

上智大学・文学部・研究員

研究者番号：５０８０２４８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、従来のドイツにおける日本学研究で定説化されている1870年代から1890年代の「独日関係の黄金時代」について再考すべく、ベルリンに創設された日独交流組織である和独会の活動実態を考究することが目的であった。
　和独会の機関誌や和独会に所属した会員の日記等から、組織の創立過程、規約、会員情報、定例会や式典、エクスカーション、義捐活動などの行事に関する和独会に関する基礎的情報を整理した。また、こうした基礎的情報を活用し、和独会の活動事例として、日露戦争下での義捐活動、日独法学者や日本人物理学者の交流について調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　和独会による活動は、日独友好を主たる目的としていたのは明らかである。だが同時に、和独会の性質から、官民共同での「日本イメージ」、「ドイツイメージ」を形成・発信していた。これは、現在も外務省が主導する、世界における日本のプレゼンスを高めることを目的とした広報文化外交の一事象としても位置づけることができる。
　本研究により、日独関係史研究の深化を図った。またそれ以上に、政治学、国際関係論では現代的な問題として認識される傾向にある広報文化外交について、明治・大正時代まで歴史的変遷を辿れることを立証した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to reconsider "the Golden Age of the Relationship between Germany and Japan" from 1870's to 1890's, which is established theory in the field of Japanology in Germany. For this reason, I focus on the interactive organisation " Wa-Doku-Kai"(Deutsch-Japanische Gesellschaft in Berlin" and its activities.
 I mainly analyzed the bulletins and historical documents of Wa-Doku-Kai and then I sorted out the basic information about Wa-Doku-Kai, for example foundation process, rules, members and events. Furthermore, through utilizing this basic information of Wa-Doku-Kai, I researched on the donation in Russo-Japanese War and the mutual interaction between Japanese and German jurists, and Japanese physicists as the cases of activities of Wa-Doku-Kai.

研究分野：日独関係史

キーワード：和独会　独日関係の黄金時代　日独交流　シーボルト　ドイツ法学　広報文化外交

１．研究開始当初の背景

1861 年 1 月（万延元年 12 月）に日普修好通商条約が締結され、現在まで続く日本とドイツの国交が正式に樹立した。2011 年には日独交流 150 周年を記念し、両国で 1000 件以上の行事が催された。こうした一連の行事は、両国の外務省をはじめ在外公館、日独交流に関連する教育機関、企業などが連携し運営された。政治、経済、教育、科学技術、文化、社会、スポーツなど幅広い分野での交流を通じ、相互理解を深め、両国の結びつきをさらに強固にすることを目的とした。

日独交流史編纂委員会編『日独交流 150 年の軌跡』（雄松堂出版、2013 年）では、現存する日独の交流組織として、OAG（ドイツ東洋文化研究協会 Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens）、日独協会、独日協会、ベルリン日独センターについて紙幅が割かれた。しかしながら、これらの機関のうち、独日協会の前身である和独会については、本書の中ではほとんど言及はない。また、和独会そのものをテーマとした論考は、拙稿「獨逸学協会学校の復興と和独会」（『洋学』第 23 号、2016 年）のみであり、日独交流 150 周年を迎えた現在でも、依然として和独会の組織の実態については不明瞭なままであるばかりか、そもそもドイツ人日本学者の間であっても和独会の認知度は低い。

研究代表者はこれまで、明治日本の近代化に寄与した外交官アレクサンダー・フォン・シーボルト（Alexander von Siebold, 1846-1911）のヨーロッパにおける活動の実態を検討してきた。そうした中で、ルール大学ボーフム教授レギーネ・マティアスが提唱した 1870 年代から 1890 年代の「独日関係の黄金時代」（„Goldenes Zeitalter“ in den deutsch-japanischen Beziehungen）において、和独会は単なる民間の日独交流組織ではなく、在ベルリン日本公使館館員が主体的に和独会の活動に参画し、ときに日独外交の進展をも左右した組織であり、こうした日独交流に関連する組織に属した両国の人びとが「独日関係の黄金時代」の担い手となったと結論づけた。一方で、和独会に所属したドイツに滞在経験のある日本人、日本に滞在経験のあるドイツ人の多くが知識層であり、学術的活動にも精力的であったこと、外交官や法学者が多くふくまれていたことから、日独友好の組織として和独会を見なさず、和独会に関する基礎的情報を整理することにより、組織の本質を明らかにすべきとの考えに至った。

２．研究の目的

本研究は、1870 年代から 1890 年代の「独日関係の黄金時代」におけるドイツに滞在経験のある日本人、日本に滞在経験のあるドイツ人の交流組織であり、ベルリンに創設された和独会の活動実態を考究することが目的である。和独会に所属した日本人、ドイツ人はいかに和独会を通じ相互交流し、両国の文化交流あるいは外交に寄与したのだろうか。和独会の基礎的情報（組織形態、所属会員の状況、活動内容）を整理し、同時期に日本国内で創設された類似組織である OAG、獨逸学協会、日独協会と比較し、組織の実態を解明していく。

また、本研究は、ドイツにおける日本学研究「独日関係の黄金時代」論の時代設定をふくめた再考にも寄与するものである。

３．研究の方法

上記の目的を達成するため、和独会が創設されたとされる 1888 年から日独青島戦争を経て、日独関係に決定的な亀裂が生まれた第一次世界大戦が終結した 1919 年までを調査対象の時期として設定した。その上で、①和独会の組織形態、所属会員の状況、活動内容に関する基礎的情報の整理（ドイツプロジェクト）、②OAG や獨逸学協会の組織形態、所属会員の状況、活動内容に関する基礎的情報の整理および和独会との比較、人的ネットワークの検討（日本プロジェクト）という、大きく分けて二つの個別研究を遂行した。

《ドイツプロジェクト》

和独会機関誌 *Mittheilungen der Deutsch-Japanischen Gesellschaft (Wa-Doku-Kai)*（以下、*MDJG*）および準機関誌 *Ost-Asien* に掲載されている和独会会員名簿、規約、活動報告などを調査・分析した。

MDJG は、日本国内に所蔵されていない。そこで、2018 年 1 月、8 月の二度にわたり、バックナンバーが所蔵されているドイツ連邦共和国ベルリンの Kunstbibliothek（ベルリン市立美術図書館）、Bibliothek des Ethnologischen Museums（フンボルト大学ベルリン付属民族学博物館図書館）、ボンの Institut für Orient- und Asienwissenchaften, Bibliothek（ボン大学付属アジア学研究所図書館）、シュトゥットガルトの Institut für Auslandsbeziehungen, Stuttgart（シュトゥットガルト外国関係研究所）で資料収集を行なった。なお、ベルリン市立美術図書館、シュトゥットガルト外国関係研究所は、事前の OPAC での所蔵調査や当該機関の司書に対する事前調査依頼の段階で、雑誌が所蔵されているとの返答を得ていたが、実際に現地で調査したところ、雑誌が行方不明であることが判明した。

Ost-Asien は、研究代表者のこれまでの研究において、おおむねバックナンバーを収集していたため、すぐさま調査・分析を進めた。

《日本プロジェクト》
OAG 機関誌 *Mittheilung der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* に掲載されている OAG 会員名簿、活動報告などを調査・分析した。また、獨協学園史資料センター所蔵獨逸学協会、獨逸学協会学校名簿や機関誌『獨逸學協会雑誌』、『學林』、関連雑誌『獨逸語学雑誌』に掲載の活動報告などを調査・分析した。

《総括》
本研究は、和独会の活動実態を考究することが目的である。したがって、和独会会員が、ドイツ渡航前後の日本滞在中に、OAG や獨逸学協会に所属していたのか、所属していたとすれば、どのような活動を行なっていたかという点に注目し、ドイツプロジェクトと日本プロジェクトの総括を行なっていった。

４．研究成果

（1）和独会の創設経緯

和独会の創設は、*Ost-Asien* によれば 1888 年 12 月、*MDJG* によれば 1890 年 6 月 11 日とされている。いずれも、和独会の設立地は、1887 年 10 月 27 日にベルリン大学に創設された東洋語学研究所（Seminar für Orientalische Sprachen an der Königlichen Friedrich-Wilhelm-Universität）、発起人は、ドイツ国内初の日本語学講座が開講された同研究所で、日本語講師を務めた哲学者井上哲次郎であったという点では一致する。
しかし、井上の『懐中雑記』には、東洋語学学校開校から約 1 カ月後の 11 月 26 日の記述に、「日本人会（ヤポニカ）ニ至ル」とあり、以後、「日本人会」、「大和会」という言葉が混在し、1889 年 7 月 20 日に、「和独会」という言葉が初めて登場した。一方、森鷗外の『独逸日記』には、1887 年 5 月 29 日の記述に、「始て大和会に臨む。大和会は在独逸日本人を以て組織す」とある。井上、森の記述から、遅くとも 1887 年 5 月以前に、在独日本人のみで大和会が創設され、月 1 会の定例会を開催していたが、1888 年頃に大和会から和独会に名称を変更し、会員も日本に滞在経験のあるドイツ人まで拡大し、日本人とドイツ人の相互交流組織となったと考えられる。
以上より、これまでのベルリン大学東洋語学研究所が創設の地であり、井上が発起人との *MDJG* や *Ost-Asien* に基づく説は、事実誤認である可能性が高いことが判明した。おそらく、自然発生的に同国人が集まり、誕生した日本人会が、大和会を経て次第に組織化されていき、和独会に改編されたと考えるのが妥当であろう。

（2）和独会会員の傾向

Ost-Asien によれば、和独会は、日本人とドイツ人計 30 名の会員で発足した。会員数は年々増加し、1910 年時点で 142 名であったが、いずれの時期も日本人会員の数がドイツ人会員の数を上回っていた。
正確な制定時期は不明だが、和独会には、和独会の目的、会員の規定、理事会などに関する全 12 条からなる規約が存在した。第 1 条では、和独会の目的が、「日本に興味を寄せるドイツ人とドイツで生活する日本人が相互に交流する場を提供し、ドイツにおいて東アジア文化の知識を広めること」であると明記されている。和独会会員は、名誉会員、正会員、外国在住会員により構成された（第 4 条）。正会員は年会費 10 マルク、外国在住会員や法人会員は年会費 5 マルクを納入し（第 7 条）、これらは和独会の運営費用に充てられた。
和独会会員の名簿は、*MDJG* に定期的に掲載され、現住所や所属を確認することができる。日本人会員の多くは、外交官、官吏、軍人、貿易商、学者、留学生であった。一方、ドイツ人会員の多くは、外交官、官吏、学者であり、アレクサンダー・フォン・シーボルト、エルヴィン・フォン・ベルツ、ルートヴィヒ・リースのような日本に滞在経験のある元御雇ドイツ人もふくまれていた。また、たとえば日独両国の法学者や物理学者は、和独会の活動を通じて交流を深めていた。

（3）和独会の活動

和独会規約第 2 条には、第 1 条の目的を達成するための手段として、会合、見学会、書籍の収集、機関誌の発行が挙げられている。*MDJG* や *Ost-Asien* に掲載された和独会の活動に関する報告によれば、第 2 条の活動は、さらに①定例会、②特別講演会、③祝宴、追悼式典、④エクスカーション、⑤義捐活動、⑥書籍の収集と図書室での公開、⑦その他に細分化され、実施されていたことが分かる。
①定例会は、第 1、第 3 土曜日の月 2 回、ベルリン市内のホテルやレストランで開催された。あらかじめ、*MDJG* や *Ost-Asien* の「雑報」で定例会の開催を告知した。当初、和独会は男性

会員のみの組織であったが、次第に男性会員の家族である女性にも拡大した。とくに④エクスカーションの姿をとらえた写真には、女性会員の姿も多く見られる。③祝宴、追悼式典の一例としては、天長節やクリスマス、帰国パーティー、アレクサンダー・フォン・シーボルトの追悼式典が挙げられる。帰国パーティーや追悼式典は、和独会の中心メンバーに関連して開催されるものであったが、いずれの祝宴、追悼式典も、和独会とベルリン日本公使館の共催であり、和独会が単なる民間組織でなかったことの証左でもある。また、注目すべきは、⑤義捐活動である。本研究では、とりわけ獨逸学協会学校の復興支援を目的とした、「Tokyo-Fest」（1902年4月）、日露戦争下での義捐活動（1904年～1905年）、東北大飢饉（1906年）を取り上げた。

（4）和独会と他組織の関係性

（2）で指摘したように、和独会には、「日本に興味を寄せるドイツ人とドイツで生活する日本人」が所属した。両国人ともに、日独両国の「友好」や「交流」に強い関心を寄せていたことから、和独会会員と同時期に日本国内に存在した日独交流組織である、OAG や獨逸学協会の会員との間には、重複が見られる。また、和独会規約第 12 条には、和独会が総会の決定により解散した場合、和独会の資産が OAG に委譲されるとある。このことからも、とくに和独会と OAG には、会員の重複のみならず、機関としての相互交流が存在していたことは、明らかである。

（5）今後の課題

本研究では、和独会の組織形態、所属会員の状況、活動内容に関する基礎的情報の整理に重点を置き、和独会の活動実態の考究を目的とした。整理した和独会の基礎的情報を利用し、たとえば拙稿「ドイツに留学した日本人物理学者たち――1893 年から 1914 年までの滞在・在学状況の集団的分析――」や「ブランデンシュタイン城シーボルト・アーカイヴ所蔵名刺群に見る、外交官アレクサンダー・フォン・シーボルトと日独交流」、学会発表「日露戦争下でのベルリン和独会による義捐活動の実態――ドイツ語月刊誌 *Ost-Asien* を手がかりに――」や「『独日関係の黄金時代』における独逸法学――穂積陳重『祖先祭祀ト日本法律』をめぐって――」などにより、本研究の成果を発表することができた。

しかしながら、上記 3 にも記したとおり、本研究の要であった *MDJG* のバックナンバーの収集が所蔵機関の不備により 1 年目のドイツ調査で終了せず、計画段階で想定していたよりも、基礎的情報の整理に時間を要した。また、学会発表を論文としてまとめる準備を進めているが、さらなる史資料の収集と調査を行ない、さらに論文の質を高め、発表したいと考えている。

和独会の基礎的情報を活用し、これまで和独会に所属する日独両国の法学者、文学者、物理学者が、和独会の活動を通じて交流を深めていたことが分かった。とくに、日独の法学者の交流についていえば、日本におけるドイツ法学の受容という法制史、法思想史上の問題にも通じる。ケーススタディを重ねることにより、和独会を通じて形成された人的ネットワークの解明を進めていきたい。

また、「独日関係の黄金時代」論の再考という点でいえば、和独会の活動を見ると、ドイツの日本学研究で自明とされていた 1870 年代から 1890 年代よりも拡大させ、1870 年代から少なくとも第一次世界大戦開戦の 1914 年までとすることも可能である。「独日関係の黄金時代」論の再考をめぐっては、和独会のみならず、和独会と同時期にベルリンに存在し、会員も重複していた日本倶楽部の活動実態の解明、OAG や獨逸学協会との比較をさらに進める必要がある。

本研究では、和独会の調査対象時期を 1888 年から 1919 年とした。和独会は、日独の外交関係に左右され、独日労働共同研究会、独日協会と組織改編が繰り返された。今後は、こうした後続組織についても調査対象としたい。本研究を通じ、和独会が「日本イメージ」、「ドイツイメージ」の形成・発信の担い手、さらにいえば日本の広報文化外交の担い手となり得たのではないかとの考えてに至った。今後、広報文化外交研究の深化を目指し、和独会はもちろんのこと、その後続組織もふくめ、さらに調査を継続させていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 堅田智子「男爵アレクサンダー・フォン・シーボルト『古き日本に関する回想　第 2 部――英国の旗の下に　1862 年～1870 年――』（1）」（『鳴滝紀要』第 28 号、シーボルト記念館、2019 年、23-44 頁）（査読無／依頼有）

② 堅田智子、稲葉肇、有賀暢迪「ドイツに留学した日本人物理学者たち――1893 年から 1914 年までの滞在・在学状況の集団的分析――」（『国立科学博物館研究報告 E 類：理工学』第 41 号、国立科学博物館、2018 年、7-21 頁）（査読有）

③ 堅田智子「男爵アレクサンダー・フォン・シーボルト『古き日本に関する回想　第 2 部――英国の旗の下に　1862 年～1870 年――』（2）」（『鳴滝紀要』第 29 号、シーボルト記念館、2019 年、9-31 頁）（査読無／依頼有）

④ 堅田智子「ブランデンシュタイン城シーボルト・アーカイヴ所蔵名刺群に見る、外交官ア

レクサンダー・フォン・シーボルトと日独交流」（『NEWS LETTER　ヨーロッパにおける 19 世紀日本関連在外資料調査研究・活用：日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築』第 3 号、大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館、2019 年、4-5 頁）（査読無／依頼有）

〔学会発表〕（計 8 件）

① 堅田智子「日露戦争下でのベルリン和独会による義捐活動の実態」（ドイツ現代史学会第 40 回大会、2017 年）
② 堅田智子「日露戦争下でのベルリン和独会による義捐活動の実態――ドイツ語月刊誌 *Ost-Asien* を手がかりに――」（史学会、2017 年）
③ 堅田智子「ベルリン和独会に見る『独日関係の黄金時代』――人的ネットワークの構築と展開をめぐって――」（大阪市立大学文学研究科プロジェクト「明治維新以来の日本と諸外国の関係」第 2 回研究会、2018 年）
④ 堅田智子「『独日関係の黄金時代』における独逸法学――穂積陳重『祖先祭祀ト日本法律』をめぐって――」（洋学史学会宇和島大会、2018 年）
⑤ 堅田智子「アレクサンダー・フォン・シーボルトによる広報外交戦略の立案と展開」（情報史研究会、2018 年）
⑥ 堅田智子「日露戦争における戦時国際法の遵守と『模範国』としての日本イメージ」（九州歴史研究会、九州西洋史学会共催シンポジウム「近代日独関係における文化と外交」2018 年）
⑦ 堅田智子「神話化された日独友好」（在東京ドイツ大使館、在東京フランス大使館共催第一次世界大戦終戦 100 年記念独仏シンポジウム、2018 年）
⑧ 堅田智子「アレクサンダー・フォン・シーボルトによる広報外交戦略の立案と展開」（日本広報学会　広報研究深化・交流部会、2019 年）

〔図書〕（計 1 件）

① 大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館編、日高薫責任編集（執筆：堅田智子ほか）『異文化を伝えた人々――19 世紀在外日本コレクション研究の現在――』臨川書店、2019 年。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。